本調査の結果からみえること

～母親の子育て意識と幼児の発達状況を中心に～

東京福祉大学専任講師　荒牧美佐子

本稿では、筆者が分析を担当した「幼児の発達状況」（第１章第６節）と「子育て意識」（第２章第７節）に関する調査結果を取り上げ、本調査の結果からみえてくることについて考察したい。

本調査において、「母親の子育て意識」に関する項目が加わったのは第２回調査からであり、今回で３回目となる。５年前の調査結果（第３回調査）では、10年前（第２回調査）よりも、「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」や「子どものことでどうしたらよいか分からなくなること」などについて、「よくある」あるいは「ときどきある」と答えた母親の割合が増加しており、少子化や地域との関係の希薄化が進む中、子育てしづらい社会になりつつあることが推察された。しかし、今回の結果では、５年前よりも否定的感情が減少していることがわかった。

その要因として考えられたのは、前回の調査よりも常勤者やパートタイムの母親の割合が高まったことによる影響である。一般的に、専業主婦の場合、有職の母親よりも否定的感情が強いとされていることから、全体に占める有職の母親の割合が拡大した今回の調査では、否定的感情が減少したかのようにみえる可能性があった。確かに、母親の就業状況別で比較してみると、専業主婦の否定的感情は、常勤者よりも高い値を示している（p.90 図２－７－２）。しかし、５年前との比較を行った結果、大変興味深いことがわかった。専業主婦はこの５年間で、否定的感情が減少している一方で、常勤者やパートタイムでは、逆に子育てへの負担感や不安感が増加していたのである。その結果、専業主婦と常勤者の差は、５年前よりも縮まっている。つまり、全体的に５年前よりも育児への否定的感情が減少したのは、専業主婦の割合が減ったためだけではないと考えられるのだ。では、なぜ、働く母親の否定的感情は増大しているのか。

これまでの研究で、有職の母親は専業主婦よりも育児への否定的感情が低いとされる要因の１つに、父親の育児や家事への関与との関連が指摘されてきた。つまり、共働き家庭の場合、専業主婦家庭よりも、父親が家事・育児に積極的に関与しているために、母親の育児への負担が少ないというわけだ。しかし、今回の調査結果では、残念ながら、５年前と比べて、父親の家事・育児への参加状況にほとんど変化はみられなかった（p.103 図３－３－３）。

つづいて考えられるのは、子どもをもつ母親にとって、“働く”ことの意味が変容しつつあるといった可能性である。この５年間に経験した経済不況は、子育て家庭にも大なり小なりネガティブな影響をもたらしたといえるだろう。その結果、働きたくなくとも、家計を支えるために働かざるを得ない。そうした母親が増えているとしたら、働くことでかえって子育てへの負担も増大しているとも考えられよう。母親の子育て観に関する項目では、「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」という回答が前回の調査よりも減少し、「子どものためには、自分ががまんするのはしかたない」という回答が増えており（p.69 図２－２－１）、「自己実現優先」の考え方が弱まり、「家族や子ども優先」の考え方が強まっているといえそうだ。

また、子育てに対する“がまん”については、世帯年収との関連が明らかになった。過去２回分の分析結果も含めて、世帯年収の高い群のほうが低い群よりも、否定的感情が低い。とくに「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思うこと」については、この10年間で、世帯年収による差が開きつつある。つまり、家庭の経済状況によって、母親の子育て意識にも違いがあると推察される（p.92 図２－７－５）。

さらに、こうした経済状況の差は、実際の子育てにも影響を与えているようだ。「幼児の発達状況」の項目で、前回から大きな変化があったのは、「オムツをしないで寝る」という項目である。５年前には、４歳児の80％以上が「オムツをしないで寝る」ことができるという結果だったが、今回は約70％にとどまった（p.51 表１－６－１）。そして、この傾向は、幼稚園児において顕著であった（p.53 図１－６－４）。本文では紙面の都合上割愛したが、実は、世帯年収の高い群ではさらに夜間のオムツへの依存が進んでいる。幼稚園に通う４歳児において、世帯年収の差（600万円未満かそれ以上か）による達成率の比較を行った結果、05年では違いがなかったのに対し（600万円未満で84.3％、600万円以上で83.9％）、10年では、600万円未満で75.1％、600万円以上では65.4％と開きがあった。オムツを使用する期間が長いほどコストもかかることから、経済的に余裕がある家庭ほど、オムツ使用に対する抵抗感が低いということだろうか。

トイレットトレーニングに限らず、子育て用品はますます便利になり、充実しつつある。もしかすると、次回の調査では、５歳児でも夜間、オムツに頼る子どもの割合が増えているかもしれない。しかし、子育て用品が便利になればなるほど、それらをどのように利用するべきか、親の悩みや迷いも増すだろう。また一方で、便利な子育て用品に頼らず、できるだけ早く排せつの自立を目指そうとするなら、根気強く子どものおもらしにつきあう“がまん”が必要となる。もし、経済的な余裕を持つことで、そうした“がまん”の一部が解消されるとしたら、それは悪いことなのだろうか。残念ながら、今回の調査結果からだけではそこまでは言及できない。望ましいとされる子育てのあり方は、社会状況とともに変化するものであり、一概に何が悪くて、何が良いかを定義するのは難しい。ただし、家族の多様化とともに、経済的な格差もまた広がっていくとすれば、それらが子どもの発達にどういった影響を及ぼすのか、そのプロセスを追っていくことは重要である。そして、父親の家事・育児参加もまた子どもの発達に寄与しているだろう。残念ながら、今回はたいした変化がみられなかったが、５年後にはどうなっているだろうか。その点にも注目していきたい。